Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-13

トツコ著「聖トーマス・アクィナス傳」の批判

五百籏頭, 眞治郎

(Citation)
国民経済雑誌,59(6):775-798

(Issue Date)
1935-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00054945

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00054945

トツコ著「聖トーマス・アクィナス傳」の批判

五百籏頭眞治郎

序　言
第一節　トツコ小傳
第二節　トツコ著「聖トーマス傳」の版本と手書本の吟味

はしがき――聖トーマスの生活殊に其聖者的特性を理解することなく、多少とも近代的先入觀に影響された頭を以て、トーマスの學問を檢討することは、適正なる光なくして研究を試みるの危險に陷り、從つて其結果はトーマス說の實體を歪曲することになりやすい。私は去る十月二十五日發行の神戸商業大學創立三十周年記念論文集に於て、「碩學中の聖者トーマス・アクィナス」と題する一篇を揭げ、トーマスの學的性格の研究には、特に彼の聖者的生活を認識するの必要なる所以を、グラープマン、マリタン、現敎皇の回勅 Studiorum Ducem 等の言葉を援用して力說しておいた。思ふにトーマスの生活を正しく理解するためには、先づ以て最も信賴するに足る傳記史料を知らねばならぬ。蓋し後代の人々は屢々古き史料を無批判に受容れ、或は之に不純なる巷說又は想像說を加味したからであ

る。此意味に於て私は古き基本的傳記史料を斷片的傳記史料と總和的傳記史料の二者に分ち、前記記念論文集に於ては主要なる斷片的傳記史料の紹介と批判とを了へた。本稿は總和的傳記史料の一部を紹介批判することを目的とする。

序　言

聖トーマスの總和的傳記史料中重要なるものは（一）グリエルモ・ダ・トッコ（Guglielmo da Tocco）の聖トーマス傳（二）ベルナール・ギードニ（Bernard Guidonis）の聖トーマス傳及び（三）ピエートロ・カロ（Pietro Calo）の聖トーマス傳卽ち是である。此三書は總和的傳記なるが故に、何れもトーマスの誕生より青年時代を經て永眠に至るまでの生活を記述して居ることは言ふを俟たない。尤も此外にナポリに於ける聖トーマス謚聖調書中に收錄された諸證言中バルトロメオ・ダ・カプアの呈出した證言が總和的傳記史料の形態を備へて居ることは既に前記記念論文集（一八二頁參照）に於て述べた通りである。

扨て茲に注目すべきは、右のトッコ、ギードニ及びカロの三傳記作家のトーマス傳が、各々固有の見解を持し又は獨自の敍述をなし居るにも拘らず、多くの點に於て實に深刻なる類似點をもつて居ることである。茲に於て上記の三著は其大部分に於て、その何れかの一書を源泉として書かれたもので

はなからうか、若し然りとすれば其何れが源泉をなしたか、或はまた上記三傳記以外に共通の源泉があつたのではなからうか、若しさうであるならば、其共通の源泉とは何であるか等の疑問が起らざるを得ない。私は此等の點に關する諸說の紹介批判を試みる筈ではあるが、或る事情のため之を後日の論題となし、本篇に於ては目次に揭げたるがごときトッコ著「トーマス傳」の批判の一節を取扱つて見たいと思ふ。私が此等目次事項に就き比較的詳論を試みる所以のものは、三總和傳記間にも上述の如き異說ある外、何れ後日明白となる如く、トッコの筆になる傳記が、多少の誤謬を犯しながらも、尙ほ他の二つの總和的傳記の主要なる源泉をなす極めて大切な史料なるが故である。

第一章　トッコの小傳

凡そ或る傳記を正しく評價するためには、其傳記作家が公正なる作家たるに必要なる要件をどの程度まで備へて居たかを知ることが絕對に肝要である。そのためには其傳記作家自身の傳記を知ることがまた必要となつて來る。殊に後日トッコの聖トーマス傳を書き上げた時日に關する論爭を批判する場合にも、また三總和傳記の依存性及び源泉を論じ、更に一般的に傳記の內部批判をする際にも、トッコの略歷を與ふ限り年代的に明確に印象して置くことが有益である。然るに中世に於ては、記念論文集中の拙稿に於て述べたる如く、傳記作家も世人も Chronologie のセンスを持たず、また聖人以

外の人の傳記を書かず、之を書く場合にも其中心人物の聖者たることを證する點に力點を置き、其他の事實は附隨的に取扱はれ居るに過ぎず、從つてトッコの如き人物の傳記を知ることは誠に困難なりと云はねばならぬ。故に瑞西フリーブルグ大學教授プリューマー(Prümmer)は、自ら編纂したあのトッコ著「聖トーマス傳」(Vita S. Thomae, Auctore Guillelmo de Tocco) の Prologus に於ても「トッコの生活と事蹟については、唯だ僅より傳はつて居ない。其誕生日と命日さへ知られて居ない」(Perpauca ad nos pervenerunt de vita gestique Guillelmo de Tocco, cujus diem et nativitatis et mortis ignoramus) と云つて居る。其後タウリサーノが此方面につき餘程努力したがまだ簡單で不完全なものである、他の學者たちは他の問題を取扱ふに際し、たまたま言及して居る程度に過ぎない。故に私はタウリサーノの研究以外に、トッコ著の聖トーマス傳、ナポリ謚聖調書、マンドヌネ、ジャンスォン、スカンドーネ、ペルスター等のたまたまトッコに言及せる部分より、斷片を拾ひ集めて來てトッコの小傳を組立てることに努めて見た。實は各事實に就ても學者によつて意見を異にする場合あるが故に、經歷上の事項を先づ掲げ、それに關する各學者の說を表にして出す考であつたが、紙幅の都合によりこれを割愛し、異論多き年齡の點は獨立に取扱ひ、次に年代順の經歷表を掲げることゝした。誠に不充分なものではあるが、後の研究者のため多少參考ともならば望外の幸である。

一

茲に云ふグリエルモ・ダ・トッコ(Guglielmo da Tocco)羅甸名グイレルムス・デ・トッコ(Guillelmus de Tocco)はイタリアのベネヴェントより約十二粁の所にあるトッコ出身の人で、アクィーノのトムマーゾ、アシージのフランチェスコ、シエナのカタリーナ等と出身地で呼ばれて居る如く、グリエルモ(英語のウイルヘルムに當る)も其出生地によつて呼ばれて居たのである。かなり有力な學者中にも、グリエルモを以て貴族の出なりとなす者があるが(註一)、之はタウリサーノも云ふ如く、カプアーナの貴族たるトッコと混同した謬説と思はれる(註二)。

(註一) cf. Prümmer, prologus p. 57 (Vita S. Thomae Aquinatis, auctore Guillelmo de Tocco)

(註二) Taurisano, "Discepoli e biografi di S. Tommaso" S. Tommaso d'Aquino, miscellanea Storico-artistica 1924. p. 148.

二

トッコの出生及び死亡の年は、いづれも共にいまだ明確にはなつて居ない。タウリサーノに從へばトッコは一二三五年乃至一二四〇年の間に生れた(註一)。彼は特に自説の根據を明にして居ないようであるが、私は以下述ぶる如き諸點より見て、彼の推定が大體當を得たるものと思ふ。ナポリに於ける謚聖調査の際(一三一九年八月四日)トッコみずからの提出した證言によれば、彼は聖トーマスが晩年ナポリに於て講義し説教して居た當時(一二七二年十月——一二七三年末)其説教講義を聞いた(Audivit eum praedicantem et legentem)と陳述し(註二)、特にトーマスの學生であつたとは云つて居な

い。然るにトッコがおなじ證言の中に於て、トーマスの斷片的傳記史料を後日に遺したトルチェッロの司教トロメオ・ダ・ルッカに就て語る時には特にトロメオがトーマス修道士の學生だつた（Qui fuit studens Fr. Thomae）と云ふ言葉を用ひて居る（註三）。當時の風習によれば、重立つた先生（lector principalis）が講義をし說教をする時には、學生は勿論のこと、手のあいて居る他の教官もまた一般修道者も悉く皆講義又は說教の席に列したものである（註四）。これから見てもトッコはその當時既に學生生活を終へてしまつて居たものと考へられる。もしタウリサーノの云ふ如く、トッコが一二三五年乃至一二四〇年に生れたものとすれば、トッコがナポリで聖トーマスの講筵に列した一二七二年乃至七三年頃は、數字計算上歐米流に數へて（以下同じ）、三十二三歲から三十七八歲頃となり、上述の推定と符合することとなる。またマンドヌネがこのころのトッコの年齡を三十歲を少し越えたころと推定したのとも合致する（註五）。殊にタウリサーノの推定したトッコの生年「一二三五年乃至一二四〇年」を一二四〇年に近づけるほどマンドヌネの推定說と接近する。

更に一三一九年八月四日に、トッコ自身が、ナポリに於ける聖トーマス謚聖調査に呈出した證言には Antiquus religiosus（老修道士）……たるグイレルムス・デ・トッコの證言と題して調書が保存されて居る（註六）。これから見ても當時老人であつたことは確實であり、更に彼のトーマス傳の中に於て自ら語るところによれば、彼が再度アヴィニオンの法皇廳に行つた時（マンドヌネ前揭論文二四頁によれば、

ナポリ諡聖調査の翌年卽ち一三二〇年）その船旅の途中、聖トーマスの傳達のお蔭で、神より種々の惠を受けたことを語る章の後半に於て、自分の如き何のとりえなき senex（老人）にも生氣が與へられ、幾多の苦痛や此度の旅の疲勞に對しても之に堪え得る力が與へられたことを謝し、更に日々物質的のことに就ても斯く絕えざる加護を賜るのであるから、精神上のことに就ては尙さら大なる加護を賜ることと信ぜざるを得ないと附言して居る（註七）。

これによつて觀ても、一三二〇年の第二回アヴィニオン旅行當時は普通ならば旅に餘程疲勞を感ずる老齡であつたことは明瞭であらう。今トッコの生年を上述の如く一二三五年乃至一二四〇年として計算すれば、ナポリに於ける諡聖調査に於て「老修道士」ダ・トッコが證言を呈出した一三一九年八月四日頃は其齡七十九才乃至八十四才、アヴィニオンへの第二回旅行に出た頃は八十才乃至八十五才となり、上記のトッコの老齡に關する記述と矛盾しない。

のみならず一三二一年十一月十日より二十六日までフォッサノーヴァに於て行はれた第二回諡聖調査の後、その調書がアヴィニオンの法皇廳に届けられるとゝに、あの獻身的な熱意を持つてゐたトッコがアヴィニオンに向はなかつた事實、及び諡聖儀式に關しても、トッコの代りに俗にジョヴァンニ・ダ・ナポリと呼ばれて居た前パリ大學神學教官ジョヴァンニ・ダ・レヂーナが任命されたこと（此人もトーマスの諡聖式當時病氣のためトーマス頌德の演說をすることが出來なかつたので、結局ドミニコ會修道士のピエール・カンティエ

が其役を勤めた）、更にまたトッコ熱望の的であつたトーマス列聖が實現し、其式典の行はるる當時の記錄に就てみても杏としてトッコの消息を缺いで居ることなど（註八）、此等の事實を綜合して考へてみると、トッコはフォッサノーヴァの第二回謚聖調査以後、老齢或は病氣のため旅行が困難であつたか、或は事によれば既に他界して居つたのかも知れない。尤も彼が既に他界して居たか否かに就てはトッコの聖トーマス傳第四十九章（Prümmer の編纂したものによる）の末尾の句を如何に解するかによつても學者の見解は二つに分れて居る。然し今はそれに觸れない。

（註一）Taurisano, op. cit. p. 148.　（註二）Proces., No. 58.

（註三）Proces., No. 60. 拙稿「碩學中の聖者トーマス・アクイナス」神戸商大創立三十周年記念論文集一七〇頁參照。

（註四）Mandonnet, Canonisation p. 21.; Taurisano, op. cit. p. 148.

（註五）Mandonnet, ibid.　（註六）Proces., No. 58.

（註七）O diffusa sancti pietas, et usque ad indignum quasi nullius meriti discipulum benignitas inclinata Doctoris, qui senem in vita sustinuit et inter afflictiones innumeras lapsum, in tantis laboribus iterati itineris sustenavit, ut speremus ipsum suis devotis in spiritualibus ampliora juvamenta tribuere, quos temporalibus quotidie non desinit adjuvare (Vita S. Thomas Aquinatis, auctore Guillelmo de Tocco, curis et laboro V. Prümmer C. XXVIII p. 102)

（註八）Mandonnet, op. cit. p. 34.; Janssens, Les premiers historiens de la vie de S. Thomas (Revue Neo-scolastique p. 211—212)

三

私は以上述べたるところ、及び記念論文集の諡聖調書の項に於てトッコに觸れたる所を參酌し、更に若干の新しき事實を加へて茲にトッコの年代順的經歷表を作り、以て後論に際して參照の用に供したいと思ふ。尤も後に詳論する部分はこれを略述し或は省略した。

トッコの經歷表

一二三五年（或は一二三五——一二四〇年）出生。

一二七二——一二七四年、ナポリでトーマスと居を同ふし、またトーマスの說敎講義等を聞いた。尙ほ當時トーマスをよく知つて居たレヂナルド・ダ・ピペルノ（Reginaldo da Piperno）トロメオ・ダ・ルッカ（Tolomeo da Lucca）ピエトロ・ダ・サン・フェリーチェ（Pietro da S. Felice）ジョヴンニ・ダ・カイアッツォ（Giovanni da Caiazzo）及びバルトロメオ・ダ・カプア（Bartolomeo da Capua）等とも知遇を得、彼等よりトーマスに關する話を聞いた。トッコがトーマスみずから De generatione et corruptione の註釋を書いて居たのを見たのも當時のことであつた。（ナポリに於けるダ・トッコ自身の證言 Proces., No. 58—65. 及び Taurisano, op. cit. p. 149 參照）此頃より一二八八年までのトッコの動靜に就ては何等史料なし。

一二八八年、この年にはルッカの地方會議に於てトッコは predicatore generale の肩書を以て呼ばれて居る。この肩書は特に有能著名な說敎師に與へられ、此肩書を有する者に對しては聖職者も

大衆も大に尊敬を拂つたものである。是によつて見ても、トッコが雄辯な、また智德兼備の人であつたことを想像するに難くない（cf. Taurisano, op. cit. p. 149.）

一二九一年、ベネヴェントのドミニコ會修道院長（cf. Proces., n. 58; Taurisano, ibid.）

一三〇〇年、ナポリ領全體の inquisitor と云ふ重職を命ぜらる。然るにその年トッコはその一屬全體と共に國王カルロ二世より追放を命ぜられて居る。タウリサーノの推測によれば、或はカルロ王がこのトッコの公職を利用して政治的復讐の道具となさんとしたるに對し、トッコがこれを肯じなかつたのかも知れない。然し確實な記錄は未だ存しない。尤も一三〇一年四月十二日には其一屬と共に歸國を許されて居る。それは或はドミニコ會の地方長、logoteta、並に教皇が、トッコのために盡力した結果ではなからうか、タウリサーノは斯く推測する。然しナポリの朝廷にも法皇廳にも、またドミニコ會にも何等此問題に關する確な記錄がない（cf. Taurisano op. cit. 150—151）。いづれにしても歸國を許された後のトッコはもはや inqisitor の肩書で呼ばれず、單に devotus（篤信者）トッコと呼ばれて居る。

一三〇二年、思ふにトッコは多分此年にバルトロメオ・ダ・カプアからトーマスの聖者たることを證する有力な事實を聞いたものと思ふ（拙稿「碩學中の聖者トーマス・アクィナス」記念論文集一七八頁參照）。私がそれを一三〇三年に行はれたと推定したのは次の理由に基く。バルトロメオがナポリに

於ける謚聖調査に呈出した證言中には大要次の如き部分が含まれてゐる。

「聖トーマスの最も親密な弟子であり伴侶であつたレヂナルド・ダ・ピペルノが、臨終に際し、生前他人に漏さなかつたトーマスの聖者たることを證する有力な事實を彼の聽罪司祭であつたジョヴアンニ・デル・ジューディチェに打ちあけた。デル・ジューディチェはそれを當時アナーニの修道院に招かれて居たバルトロメオ自身に告げた。そこでバルトロメオは出來得る限り速に、それを先づ第一にトッコに知らせ、それから他の修道者にも告げ、のちには當時ローマに居られた教皇ベネディクテウスのお耳にも入れた。」(Proces., n. 79 傍點—筆者)。然るに教皇ベネディクテウス十一世は、戸塚文卿師の研究によれば、一三〇三年より翌一三〇四年まで教皇に在位された(フーピー原著戸塚譯カトリック思想史卷末附錄年表參照)筈であるから、バルトロメオが右の話を教皇ベネディクテウス十一世の耳に入れたのは遲くも一三〇四年であり、且つトッコに傳へたのはそれよりも前の一番初めの頃であるから、恐らく一三〇三年と思はれる。此點就にてはジャンスォン (op. cit p. 206—210) も、マンドヌネ (op. cit. 12) も異論なきものの如くである。但しペルスターはベネディクテウス十一世の在位期間を一三〇四年より其翌五年までと認めて居るが、バルトロメオが急ぎトッコに上述の話を傳へた年に關する限り、それは一三〇四年又はそれより以前のことであると說き、必しも一三〇三年

說に積極的反對をして居ない（Pelster, "Die älteren Biographien des hl. Thomas von Aquino," Zeitschrift für Katholische Theologie, 1920. S. 379)。

一三一七年、ドミニコ會シチリア地方會議に於て lector のロベルトと共にトーマスの奇蹟を調査し、其結果を教皇に披瀝し、以て謚聖調査の公認を促進すべき任務を課せらる（前掲記念論文集の拙稿一八〇頁參照）、爾來マルシコ其他に於て一三一八年七月頃までトーマスに關する調査をなす。

一三一八年、の多分七月頃、海路フランスのアヴィニオンにあつた法皇廳に向ふべく出帆した。南フランスで上陸してアヴィニオンに着いたのは、同年の八月（ペルスター、ジャンスオン等參照）。

一三一八年九月十三日、教皇は公式にトーマスに關する列聖審議を行ふべきことを宣言した。この當時トッコのアヴィニオンに居つたことは確實であるが、何時頃イタリアへ歸國の途に就いたかは不明（マンドヌネ、ジャンスオン等參照）。

一三一八年十二月、にはイタリアのアナーニ(Anagni)にあるドミニコ會修道院に居た（ジャンスオン參照）。

一三一九年四月より七月まで、トーマス臨終の地であるフォッサノーヴァに滯在して聖者の臨終の模樣、其後行はれた奇蹟等を調査す（ジャンスオン、マンドヌネ等參照）。

一三一九年七月二十一日より九月十八日まで、ナポリに於てトーマスの第一回謚聖調査行はる。その期間トッコもナポリにおつたことは確實と云ふべく、八月四日には自ら證言を呈出した（cf.

proces. No. 58)

一三二〇年、トッコはナポリに於ける第一回謚聖調書の完了を待つて、再びアヴィニオンの法皇廳に現る。マンドヌネの云ふ所によればトッコのアヴィニオンに到着したのは此年の初めの頃である（Mandonnet, op. cit. p, 24）。

一三二一年六月一日、教皇ヨハネス二十二世は、ナポリの謚聖調査に於ては、フォッサノーヴァ方面在住の人々の證言を充分に得られざりしを遺憾となし、再びフォッサノーヴァに於て謚聖調査を行ふべき旨の書簡を認め、同時に新調査委員をも任命された。その當時トッコが法皇廳にあつて、右の書簡を受け取り、之をイタリアのフォッサノーヴァに於ける第二回謚聖調査始會式に於て公式に朗讀すべかりしことは、第一回のナポリに於ける謚聖調査の場合と同様である。トッコが其後何時頃アヴィニオンを去つたかは明でない。

一三二一年十一月十日――同二十六日、フォッサノーヴァに於て謚聖調査を行ふ。此時トッコも同地にあつたものと想像される（cf, Janssens, op. cit. p. 211.）。

此頃より後トッコに關する消息は絶え、右のフォッサノーヴァに於ける調書がアヴィニオンの法皇廳に届けられた時（其明確なる時日は不明であるが、マンドヌネは早くも一三二二年と云つて居る――マンドヌネ前揭書三四頁參照）にもトッコの姿はなく、また一三二三年七月十八日の聖トーマス謚聖式の盛典にも列席して居なかつた。

第二節　トッコ著「聖トーマス傳」の版本と手書本の吟味

一

トッコの聖トーマス傳を、現在我々が比較的容易に入手し、史料として之を直に實用に供する難易の點より觀れば、世界のアルキヴィオに僅に散在せる手書本よりも、既に印刷に附せられた版本がさしづめ問題となることは云ふを俟たない。この意味に於て、私は先づトッコの聖トーマス傳の版本から紹介して行きたいと思ふ。然し版本は云ふ迄もなく何れ著者の自筆本か手寫本か版本かを底本として印刷に附せられたものである。從つて其底本が果して著者の原本として權威あるものなりや否やと云ふ眞贋の鑑定 Auctoritas の吟味問題が自ら起らざるを得ない。蓋し古書に就きては、甲の著述として知られて來たものが、事實其全部又は一部が乙の著述なる場合もあるからである。例へば聖トーマスの著述と云はれて居た De regimine principum の後部が、トロメオ・ダ・ルッカの著であつたり（論文集拙稿一七〇頁一七三頁參照）、ヴィヴェース版の聖トーマス全集に收錄されて居る Summa totius logicae がトーマスの著としては頗る疑はしきものであつたりする如きそれである。また假令底本となつた手書本が確に著者の著述であつても、そこに原本の一部分が脫漏し、或は誤寫其他不純なる攙入が行はれ、爲に內容を全體的に傳へて居ない樣なことがないかと云ふ integritas 吟味の問題も起る。そして版本の源泉をなした此等手書本の auctoritas 及び integritas の如何は、同時に版本其ものゝ史料的價値の決

定に參與するものと云はねばならない。故に本節に於ては版本の紹介をなすと共に、其基礎をなしたあらゆる手書本にも言及し、以て些か之が吟味を行ひたいと思ふ。尤も此種の研究は性質上極めて必要なるにも拘らず、比較的近年まで殆んど捨てゝ顧られなかつた狀態にある。從つて研究史料に乏しく且つ歐洲より遠く離れて居る筆者にとつては、充分なる成果を期することは寧ろ不可能に近い。幸に鳥なき里の蝙蝠ともなるを得ば望外の收得と思ふ。

二

トッコがトーマス傳を編纂した時期に就きては、何れ後日稿を改めて論ずるが、いくら遲く推定する學者と雖も一三二三年のトーマス謚聖式後數年より以後に數へることは出來ないであらう。然し筆者の知る文獻考證の範圍に於ては、印刷に附せられたトッコ著述の聖トーマス傳として最も早く出版されたものは次に掲ぐるものである。尤もそれ以前に於て既に出版されたものがあつたかも知れないが、未だ何等確な記錄を見るに至らない。

一、一五七七年デ・レクティス（De Lectis）によつてイタリア語に譯出せられ、ヴェネチアから出版されたトッコの聖トーマス傳

二、一五八八年同じくヴェネチアよりラテン文で出版されたトッコの聖トーマス傳

以上二著が如何なる手書本を底本としたかは不明であり、此方面の研究者であるペルスターは一五

八八年のラテン語版を見ようと努めたが、終に成功するに至らなかつた旨を物語つて居る。然しペルスターに從へば一七〇八年 Sancti Thomae Summa suo auctori vindicata, sive de Vincentii Bellovacensis scriptis dissertatio を書き、更に一七一九年 Scriptores Ordinis Praedicatorum (cf. p. 552) を書いたエシャール (Échard) の時代には、トッコ原著の上記二箇の版本はバルベリーニ (Barberini) のビブリオテーカに於て讀むことが出來たとのことである(註)。

(註) Pelster, "Die älteren Biographien des hl. Thomas von Aquino" Zeitschrift f. Katholische Theologie, S. 244.

III、"Historia Beati Thomae de Aquino" Acta Sanctorum, Martii Tomus I, Parisiis et Romae, Palmé 1865.

諸聖人の傳記の大規模にして貴重なる編纂を企てたイエズス會修道士ベルヂック人ボラン (Bolland 1599—1665) の遺業を繼いだ所謂ボランディスト (Bollandistes) に屬するヘンシェン (Henschen) 及びパーペブロック (Papebrock) は、彼等の編輯する上掲 Acta Sanctorum のうちにトッコの聖トーマス傳を收錄した。此版本には其底本が明にされて居る。卽ち彼等の云ふ所によれば、其底本は當時ケルンのクロイツヘーレン (Kreuzherren) 修道院に所有されて居た手寫本 (Codex Crucigerorum Coloniensium) を用ひたとのことである。此手書本は其後失はれて今日之を見ることが出來ないが、上記の版本より見れば隨分多分に缺陷を持つて居ることは疑を容れない (cf. Janssens op. cit. p. 209; Prüm-

mer, op. cit. pp. 61. 62) 然し其後約四十三年間此種問題に關する史料出版又は史料論として注目すべきものは殆んどなかつた。一九〇八年に至り漸くエンドレス (Endres) が聖トーマス傳記史料論を Historisches Jahrbuch (XXIX) に發表した(其所論の內容は他日之を論評するの機會を惠まるゝことを期待して居る)。然しそれによつて完本に近い底本が明かにされたのでもなく、また新底本による出版があつたのでもないことは確實である。從つてもつと完本に近い古寫本又は傳本を底本とした眞のトッコのトーマス傳を得たいとの聲は漸く高まつて來た。茲に於てフリーブールグ大學のプリューマー教授は後に述ぶる如き數箇の手書本を用ひトッコのトーマス傳を再び建て直し、之を雜誌 Revue Thomiste の一九一三年及び一九一四年號に、順次發表して行つたが、途中歐洲大戰に會して發表中止の止むなきに至つた。然し此事業は各方面の要望により戰後漸くにして再び繼續されることゝなつた、斯くて一九二四年の十一二月號に、原稿の最終部分が揭載さるると共に此傳記は一先づ完結した。その別摺は後に單行本となり Fontes Vitae S. Thomae Aquinatis (聖トーマス・アクイナス傳記史料)第二冊として刊行さるゝことゝなつた。卽ち次に揭ぐるものがそれである。

四、 Vita S. Thomae Aquinatis Auctore Guillelmo de Tocco, Librairie Saint-Thomas-d'Aquin, Saint-Maximin (Var)

本書に就きては項を分ち、先づプリューマーが、之を編纂するに當り參照した手寫本に就て述べる

ことゝする。(cf. op. cit. Prologus)。

三

プリューマーは英、獨、佛、白、和、墺、伊等に於て見出した後に掲ぐる如き手寫本中より、一番純粹確實であり、また多分最も古いと思はれた英國博物館所藏本バーネー（Burney）の Codex（十四世紀中葉筆寫）を底本として出版した。然し手寫本によつて異同ある箇所卽ち variantes に就いは、フィレンツェの Codex（十四世紀の半ばより少し以前に筆寫）及びヴァティカーノの Codex（十四世紀末筆寫）の分を列記し、更に variantes が特に重要なる場合に限り、上に述べた Bollandistes が Acta Sanctorum に收錄して居る分のテキストをも列記して參照に便ならしめてゐる。因にプリューマーが參照した手寫本は次の通りである。此等手寫本に關する說明は、大體プリューマーの見解を紹介することに主眼を置いた、尤も多少他の學者の見解や私の言葉を交へたところもある。然しプリューマー說に對する批判はその後に項を改めて論ずることとした。

(1) Codex Burneianus (No. 349 British Museum)

これは他の手寫本に比し最も精密に筆寫され、また文字も最も明瞭である。筆者が底本に於て正確に讀み得なかつた箇所に就ては、筆寫した本の緣に小さい赤字で其旨を記して居り、卷末には「底本に於ては此所までより書かれてゐない」(Non inveni plus in exemplari, quam hucusque) と記してゐる。

この手寫本の保存されてゐる狀態も最後の一二枚（260×190 mm.）を除けば實に見事である。

(2) Codex Florentinus (Convent soppressi I. VII. 27)

イタリアへ美術鑑賞の行脚に出かける者が、畫家で聖域に達した福者アンジェリコ修道士(Beato Fra Angelico) の、あの落ついた聖なる氣品と美しさをたゝへた壁畫繪畫などを心ゆくまで鑑賞し、また聖アントニオ（一四五九年永眠）や、サヴォナローラの生前住まつた修道院とその居室に身を置いて、それらの人々の生活を追想せんとする者の必ず訪れるあのフィレンツェのサン・マルコ博物館は、その昔ドミニコ會に屬する修道院であつた。右に揭げた Codex Florentinus はプリューマーの云ふ如くもとは此修道院の所藏したものであるが、此修道院が廢されてからはフィレンツェの大學で見られるやうになつた。ペルスターは此手寫本が同地の Biblioteca Nazionale（國立圖書館）にあると云つて大學にあるとは云つて居ない。然らば此兩說は何れが正しいか。イタリア文部省の Annuario に於けるフィレンツェ大學と、フィレンツェ國立圖書館の官制及び職員錄を見ても兩者は全然獨立せるものゝ如く、また場所的に云つても大學は元のサン・マルコ修道院の直ぐ附近にあり、之に反して國立圖書館はそれより隨分距つたあの有名な Galleria degli Uffici の附近にある。故に單に此等の點から云へばプリューマーの說の方が可然程度が多い。のみならずプリューマーは直接此の Codex を利用した人であるから、其人の言はペルスターの言よりも斷然高度の可然程度を持つものと云はねばならぬ。(cf.

Prümmer, ibid.; Pelster. op. cit. S. 247)。

(3) Codex Vaticanus (Bibl. Vat. lat. 10150)

此手寫本は、ローマとフィレンツェの中間にあるオルヴィエート（Orvieto）のドミニコ會修道院に屬して居たものを一九一二年より數年前に、有名なる圖書館主任エールレ（Ehrle）の手によつてヴァティカーノの圖書館所藏に歸したものである。このCodexにはトッコの聖トーマス傳のほかに、聖トーマスの祝日に誦へられる「讀誦」(lectio)、聖トーマスの最も大なる信心の的であつた「聖體」の祝日に於けるトーマスの說教、聖體の祝日に誦へられたる「聖トーマスの筆になる聖體の話」と云ふ讀誦等興味ある手寫本も併せ含まれて居る。（尤も他のCodexもダ・トッコのトーマス傳以外それぞれ種々の手寫本を含んで居ることあるは云ふまでもない）。要するに此Codexは前二箇のCodexに比すれば、より後年のものでもあり、またよい加減に放棄されて殘闕の生じて居る箇所も少くないが、よく配列して組立ててあり、前述のCodexなどに比し、より入念に書かれて居る點あることも決して稀ではない。

(4) Codex Monacensis (Bibl. reg. Monac. 14547 : Catal. IV, p. 191)

此ミュンヘンのCodexは十五世紀に書かれたものである。

(5) Codex Viennensis (Bibl. convent. Benedictinorum Scotiae cod. 318, in catalog. ab, Hubl. confecto p. 347)

此ヴィーンの Codex は前のミュンヘンの Codex と總てに於て相類似して居る。

(6) Codex Trevirensis (Bibl. urbis catal. ms. 310)

此トリアー (Trier) の Codex も巧に編輯されて居るが、比較的新しい十五世紀の筆寫本であるから、最初の三つ程の價値を持つて居ないものと見なければならぬ。

(7) ラインのウトレヒト (Utrajecti ad Rhenum) の Codex (Bibl, Univ. cod. 395)

(8) バーデンのカールスルーエ (Karlsruhe in Badenia) の Codex (IV. 379)

(9) ナポリ (Neapoli) の Codex (Bibl. nat. cod. VIII, B. G. fol, 93—98)

此最後の三つもトッコのトーマス傳を包含して居るが、多少とも省畧して編纂されて居り、而も省畧されたものは凡そ皆 valoris historici の少さものである。のみならず此三つの Codex は後代の筆寫にかかり、更に其出來榮えも常に手際よくはなかつたのである。

以上を以てプリューマーがトッコ原著のトーマス傳を新に編纂するに際し、如何なる手寫本を參考し、更に如何なる理由で Codex Bruneianus を底本として採用したか、また何故他の二三の手寫本を variantes 對比用として取り上ぐるに至つたかゞ明にされたことゝ思ふ。然らばプリューマーの勞作と見解は如何に之を評價するか。私は以下項を改めて些か此點に觸れて見たいと思ふ。

四

先づ端的に結論を云へば、右のプリューマーの編纂書は、今日迄に出版されたトッコ原著の聖トーマス傳中では一番優秀なものである。然しこれ以上改善の餘地なき完本とは決して考へられない。先づ第一に今日までダ・トッコの自筆本、又はそれと同一の正確さを持つた古寫本なるものが未だ發見されて居ない。ギードニのトーマス傳に就ては多くの手寫本が發見されたにも拘らず、トッコの著書に就ては極めて少ない。將來或は益々發見されるかも知れない。現にペルスターの如きプリューマーの參照しなかつた數箇の手寫本、殊に Bollandistes の系統の手寫本を紹介して居る。就中もと

(1)　テーゲルンゼー修道院（Kloster Tegernsee）に屬して居た手寫本の如きは、十五世紀のもので、Prologus もなく其他にも脱漏あり、攙入もあつて不純になつて居る。然し或る箇所ではプリューマーの底本をなした Codex Burneianus には見出されないところがあり、其箇所ではプリューマーの編著よりトッコのトーマス傳の原形がよりよく保存されて居るとのことである。此の手寫本は Frater Thomas de Aquino de nobili comitum genere de doms Aquinorum と云ふ句で始まり、ボランディストと同じ結びの言葉、卽ち virtus divine potencie, quod deerat virtuti nature で終つて居り、Clm 14547 に於ても多くの點でボランディストの底本と類似して居ることが窺はれる。此の手寫本以外にペルスターにより數へられて居るものは次の二つである。

(2)　ミュヘン大會敎會史研究室所藏の手寫本

これはボランディスト系統又は Clm. 14547 の系統に屬するものと思はれる。

(3) 聖トーマス臨終の場所であつたフォッサノーヴァ修院と同じく、チステルチエンセ（cistercense（伊）, Zisterzienser（獨） cistercien（佛））と呼ばれる修道會員の經營になるオーストリアのハイリゲンクロイツ修道院所藏の手寫本（N. 24）

之は十四世紀のもので、其結語はボランディト編のトッコ著トーマス傳の第一二三番と同じ言葉で終つて居る。

以上ペルスターの云ふことが眞なりとせば、プリューマーの底本と系統を異にするボランディスト系統の手寫本(1)で、ボランディステンとの variantes を正し得ると共に、プリューマー底本との variantes をも正し得る手寫本が認められたことゝなる。吾人は此手寫本の內容が一日も早く公表されることを望んでやまない。今後漸次手寫本が發見さるゝと共に、其類緣性・依存性・系統等の吟味が愈々精密に行はるゝに至らば、原本確定は現在より更に進歩することは疑なきところである。從來系統を同うする數冊の手寫本に就て variantes を對比して、新しいよりよき讀み方を推定して行つたものが、系統を異にする手寫本を發見することによつて、從來の系統に缺けて居たものを發見して原本確定に躍進的進歩をすることは決して想像に難くない。此意味に於て系統を異にする完本が發見された時は勿論のこと、integritas に於て劣つた比較的新しい年代の手寫本を取扱ふ場合に於ても、それの系統が異

る場合には、單に integritas が劣り年代が新しいと云ふだけでは捨てらるべきではない。また系統の混合されて居るものを注意すべきは云ふを俟たない。聖トーマスの總和的傳記に就ては單にトッコの手寫本間に於て系統を吟味する必要あると共に、トッコとギードニとの混同に就ても吟味をしなければならない。

プリューマーは以上種々の點に於て缺くる所はなかつたか、吾人は彼の過去の業蹟を認め、彼に感謝する點に於て人後におちない。然し完全性を期する人間の學問的性格より見れば、彼はペルスターも云ふ如く餘りに甚しく Codex Burneianus に膠着し過ぎた嫌はなかつたか、また系統の研究にも少しく留意が缺けて居たのではなからうか、系統研究の不足感は、何れ後日明なる如く、トッコ、ギードニ、カロの相互依存問題に對する彼の解答に就ても感ぜられるところである。

またプリューマーが variantes 對比の爲めに用ひたフィレンツェの Codex の如きも、ペルスターに從へば、これはサン・マルコ修院の所藏本ではあつたが、バレルモで書かれたもので、古文書のテキストを平氣で變改して筆寫した手寫本の一に屬すると云ふ。この說の正否は手寫本自體の具體的內容の發表をまつて始めて確定し得る所である。然し此點に於てもプリューマーの吟味は充分であつたか多少の疑なきを得ない（註）。

（註）Pelster, op. cit, S, 243 ff.